伊地知文庫
文庫20
224
1

伊地知氏書冊

諸20
224

ゆえ当いろふいろく神
代よりハ天地深樹のごとく繁神
めの神の言葉なりとへ仁代
よハ酒折の宮のくに日本武の
尊ハ也ものよわ抜ろわ歌を
乃尊若毛姫なももてあそ
ぶなりたるわぬまて所ハ今ふ
のたあよ世ていもてそんん
いろく人むまれて志門のなろハ
天地性なわ物よ感してうて
志性の歌なわろろ門のたみ
よりあいを志わくん成毛た
志毛所よわろうきハなろ

[illegible]
あらいとく天地のひとれ日月の
あらちめ禽獸のあめまとま
ひ草木れ[illegible]さあらハ天地の
ばとまこと父子の[illegible]
の数り男女のんと人元牙れ
志ゑ〳〵朋友のまゝりあるも
神れちひれのをゝへ程度の
つえをこゑ[illegible]ようゝひく
よこしまたゝくさハ成りよあけ
たりくばこわ[illegible]
よとなれまこ奇ハ世ゝこゝゑ
よわゑあゝんりいとく月氏ゑ

ハ人あゝゑ紙ゝ人農具ゑハ
紙紙ばこわ日本ゑハ三ゑ と添
して月ゝを拾ゝあゑ紙物ゝむを
いゝゝまこゑのよゝく方物れ形紙
あゝこゝあ紙わゝあゑ紙ゑせき
吾紙のゝんゝよゝう富昌を
あわゑ人れまこ奇れよにい
こわゝこゑ邪道のんゝくハな
ものゝひゝゑあゝんゑ人ゑほ
て成こゑ　芸ゑ二年桂月
下旬飯依房國亀山宿神
主誌こ

也て所條目

一也て所の九八学をいりゆいてく初
学術奥国の至寶なるといい
ろく〻引多〻さいへこあげ義
所も紙のこと守めそを初人の間
きんふけく〻初所より師匠の
しこハ祖師より伝祖不伝のとふ
りことゝなるものまくもはまま
加せいひおし弥陀をそれんるり
て所のこのよく伝れとを九能
白紙字くまねを紙をんのまろ
そ中一の不学をなしわ数をもぬ
分ものく人めりんこせハ法まよう合

さうへ神の時は席の外なら
ぬやうにこゝかしこ
いひ〳〵あるくもいりあひ
とうく〳〵こんやこゝはさんばの
のかゝるやうへかろさんまち
乃白

名もたゝぬ中まよ見さく川角ふ
袁白ハよ紀ゆなゝ〳〵ねやとに人れ
ゆ〳〵やうにとへ〳〵とにを乃
いさあなうわ

空ゆかりのいろくなるうん
行ゆくもたゝぬ雅家に日ハ暮く
いつかさうわのあゝまゝの来

年ゆれと我ゆの中とおもをそ
もこゝかもあるわてのゆ結ハ
空ゆかりのいろくなるうん
漕まよふ舟ゆ浦よ日ハ暮て
行ゆくもたゝぬ船ゆ旅ねて
見ハ夜半鐘色至客船の心
いつかさうのあゝまゝの来
山を行うさ世ゆ近さんをそ
見ハ世ゆ絶て山よ入人山よくも
行うきゆハいつち行らん初中ほ
のかりなわ
一まこゝかゆかこゝとそむをそ
ふと別よゆハ体ゝひく

面白や人はたものひさうゝん
大内やまと舟の月絵なりあるて
とうてこそうん安鴻乃へ
恋のなかさきちこひ俤のやうまく
より紫はたの白ゝまくも　面白のへ
ゝう人はつまたなきさたとうゝし
きちはたと人のまと奇まくもまと舟
の月絵なりひやうとこそはたの
乃はまさるれ人丸の面白まてを
とうや人は安鴻はたのなとあ
まの刀たゝ人はたの勇文成とを
三綱五常一色をひさて八鴻船
ゝの鴻絵ゝ人

一ゝうくあまりつゝく結ん
とれん同ゝとなるゝ
ゝみゝく結うゝ
文はの歌の歌結ゝはたを
絵は文はの歌はゝ歌結ゝ
ゝゝく同ゝとなり
その歌はこひる面人文を繞て
きけゝ家そあゝ
ゝはに吟ゝを山風
ゝの歌やうゝん
絵見同ゝとなり初学抜ゝ
ゝはあゝゝゝなり

一ゝ歌清文

衣類や竹田の町に夏間用杠
枕七百五人〳〵
懐や紙紙尺教意[illegible]
名刺五百[illegible]人〳〵
三婦人の八濃の[illegible]
[illegible]
新式用紙守人〳〵略〳〵
一[illegible]の禁[illegible]八[illegible]糸[illegible]白禁
白[illegible]
微[illegible]
[illegible]用紙[illegible]人
と[illegible]時濃[illegible]の人[illegible]
[illegible]

[illegible]
小[illegible]曲のやうに[illegible]我[illegible]と付
[illegible]
合[illegible]
さいく[illegible]人に[illegible]合と[illegible]
て我[illegible]付[illegible]我[illegible]ふ人に付
ぬふ[illegible]紙[illegible]
て[illegible]紙[illegible]我[illegible]
[illegible]
と[illegible]人〳〵[illegible]
殺戒[illegible]
[illegible]
[illegible]紙[illegible]

乳をはなれよく〳〵あそびてこそ
生まれたるわらうべし百日乃
をしへならひさうらふ事わ小児
あるべし
一 産前のこしあはせとりて押かへ
待るをやすく治る事なし其
婦人の分別と批判をなすべし式を
生産の前後に分なるへき事に
よく〳〵あらそのなして様子の
貴賤なかるべし
一 産前後に流毒あり神仏をたのむべし
悪文とかうべし要文をあさふ
女色をこのむべき事ばかりのみ下をあ

命とり吉事なる薬とかうを
くすりあしくとかくうつし薬や
かかる事なりしたまひ世と論まと
たつかうやうの人あと能ある
子はなるべし信者の神仏の
家内あつもゑのべし
一 産前の養生八神仏薬あるべし
悪文には出産とまとめ要文をのせ
こし女色にまさ治らる薬おきん
下るとおもれと言をとり悪薬
ちりん薬あきつめ身を枚
出薬そのへ悪薬すまらる薬
清むらんたるわかつ新人あるその

作り出す句をおゐて作るへし八百万
神のめくみあらく無尽の俳諧代
の誹諧子孫繁栄を崇むへき也
さてれんかハ
一表の序破急ハ一二三句の
折より二面の内を初五句序
中ハ破末ハ急なり一面ハ二
句ゑんやさ子ハ人々序とも急とも
なとも下一句まて人事破の文
字の内をよく見下
一句続のこと八句め縁あむらことく
其のつき懐紙折らてとし簾残
あむよ行のかへをそろへよ残

なりてまた下まのおあめハカめく
ふしよりまつへともゆへねた
あことさハあさやうたしの菓又
くさき残折よすてた中の京
なるれさうさとしすを書す
もさ句くたれかとをてまたそん
まくたくけやうよしわれ
へしほよかくらんしまくさを
てよそとへらひの句を知へ下
之大れ
懐紙第二のうち急由緒の
なまくもつまらめう一やほへた
残の引残まりてうかくを付

へしき合にさへられぬやうに
左様の句を作るもあり
指南者ハ猶もつて当時の専ら誹
諧に力をつくし是にたより見てもつて生
計の名誉を得れ家内繁栄の色
見へけれハいかにもうらやまし
もはやらて堪長するたのしミなく
当所盛しけれとも是にたより当世
おもくもなき行あひもしきん人是式
之指南へし右と集る誹諧者
立るもの八式なる所以心のよし
道義の誹諧にてえ見てもくろ
一 昔労しておもしろふる誹諧業

まんよりハ幸労をとも厭いて
うち乗のけりとのおもむき
をあんずるにハ志しもあり
誹諧の道ミ石にけ入なるおもむき
指導しくる業とも業しらず遥
一 愛しぬるをとのミいぬる事に
付たる得る人多く又し敬ひて
のよふハなるほとしる毎にも学
元来句とは当代誹諧をよむへう
況初心者をや
一 前句にするにもかゝ付くの
ねとすゝめとくつくハ無用の作
准之

一世にあれば兵の多くまて世にあの
位をうしなひ世にあれば世にあの
ちからをうしなひ世にあれば世にあ
初めの時八王子人成すめんたた
あふたりこのるは兵かく彩へ
絵をなとをうしなひて世にあり
さうこの世にあるは組世世組
兵九世にあ成者へ成けて
世にあるなと当世にある人格なれ
ば格式にて一位をあてるこれた
たりそれなこの世にあの行
やうのあるけをもつて付て
ちるよりわるへ水世にあり

こうんてありそのこれハそよ　ちさ
ふ　引ゝなつ　さふ
春世にある水ハ秋ふけ名
春うりむこ今のふ河春家に
時のまよ部ちこそさく西の空
もつうまてのまれたるれ
あまくにうすむる月の月
春の彩花のまりひよ山ちて
昭春もあ世ちんこの春
夕月あるこさ花のトりけ
色ホの白ホすわ花白立る
色味世へこハ格人合のこあ
波世にあの格ちりくたちへ

一風ヒ書をぬこうるふ夕山ゑれ
ゑ家よりくこと付 前の前のこうる
ふ書称なしひくこと付 前 繁
ここうるよ 枯住の柳と付 あう
すここうるふ小いつうるをとてん
いつう家人を墨書よそあんをと付
るり無一以一貫く
一遍奇小拙歌 北人さりの書
日本古花 友今和奇集 伊勢
物語 源信 古文真寶 三体詩
古詩 詩経 法華経 餘力あう
時よ大さいうんなうるへ
一家白揚才三寸あるハ指合

なく指迫ちるよりやうく
てなうるこ中方北人歌ゑ
本方のく歌こうるハ切字八三位
切字のうるをそあるあるこ足ある
よりくこうやを切字ふ ふう
ゆれや なれやうし
ぬ花う なりいつこいつ
ゆう下初月たくうのこ
と腸ハ二ゑをとへ二ゑをとへ才
三よりとへうこ次才三より九十八
白指迫のくあり感 無曲
迫 現未のく歌こうるをと医
白北書ハ花よりふ白ハふ紙

霧ふよろ遊の翔凡
定近さ毒の山仙て面腈く
跡見よ刃れ八刃へ后り主殺面哉
条よれつてふ毒御のく霧
冬れし哀の芝草そそれおく
是ホの毎もうけいと刃んあへし
一下句ち二五三呂五二呂三とそ
あり二又三呂八よりし又上呂三八
あ了此義当代つよく沙汰なし
一ま字雅日痛定羽枕羽指上
影後指後影上荼切る鼎台
西る五文守文良守主字冠
不思議不思香ちす余る

日之中冬一字お遊羽痛余指
付 是ホの語よく誓らし
言之上手よ耳をとうる世沙汰を
はえさろり肝要たる我儀ハ
うりそて人よ己ふうを恥志てし
して知ろう知きん人よもふ
なりてうるへし児ハ一旦の恥不
児ハ末代の恥辱なるへし
一字目跡 強力跡 書聲跡 あまま跡
五乙跡 逃去跡 行きま跡 一夏跡
五濁跡 物哀跡 めでたの跡 十
八跡 三十跡 六字跡 なそいうかくも
おる字合多行れとも初学のま

てあまりかよく付侍るより
百性たちなどもなり
一てかをと付
乃ち八ちろたれまさりに
ものくのこと人のさうしてこと
ばりやうの者をこなれて
ものかをりうてひて面白
一人きむりの三月雪もうし
あるとて殺八本ちう月指指
第此白おのてにをとよくあさ
利侍るはは味立夫
一京乳付
鄙ちう種屋の実ホうれさく

小ホ指をくにてそうれあれ
雪ホ明ゆくにあ賀のりう海
秋の表此たちうの山さかひあ
一鄙白付
仏法僧をあもとそなけ
人八年てあくにこれ雪を懐恋
ものいふ者の形もこそあれ
恋雪もて八なりあ我こそあらん
ものあよ仏くちう人ちう山川さ
別あれ彼もさきの世をもて
一うけてよをん
日を夕風よ方やたのまん
雪をあけ八秋ひくまりう衣

[illegible]

一十文字付三百匹[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一夜より[illegible]

[illegible]十日の菊の庭

[illegible]

節去蜂愁蝶不知
暁庭還繞折殘枝

自縁今日人心別
未必秋香一夜衰

日[illegible]

[illegible]

[illegible]

毎年あるいはまたく作るうえ人数のる
きたるまてうく対作れれ来対さ
かりんそて我のあ我ちるむちとと
蓄の好土八事の対面をくんくんくんこ
南色八やうく多稱まて行来我
不知集し紙自然こは手まあ民
一紙の苦いこをそうん人ち寄くく物
くの白紙ちるてかるくんく

四月

一月九初　一三三　一四五九除　一つ三ゐ三さ　一巻伏　一秋の指　一段年　一つ三仁　一柳　一陳月　一ち宋　一水めるむ

一三九の初　一見と唱　一年動く　一菓子ケもち　一初夏　一腹赤の伍須　一為水　一門杉　一蕎　一赤凡　一うう　一あうう

一菊の花
一霧あてり
一菊
一松の緑立
一七草 なな草 なな草
一子日
一小弓あそび
一御寛木
一青柳
一蛍かり
一水清 こころ
一紙やく
一聖山の下もえ
一菜畑
一橘えらう
一松の花
一すのめかり
一白馬
一卯杖
一柴引
一御寛 寛ま こころ きゆう
一青柳うつし
一寛ま水
一萩の繭糸
一去年迄 去年分
一勝屋

一菜の花
一さか姫 二月より後
一田うえ 日すく
一角ぐむ草
一春を知らく
一桜葉 二月ゆき
一御薬
一鳴鳥

二月

一寒さ
一屠蘇
一花を結
一南柔 二月上の申月く
一菜の花
一きさらぎ
一橘
一卯子
八幡の住吉の祭礼 三月午辰日 二月卯卯八幡 申神日 上

一ちるはなびき　一ほたるはなれ
一ゆふこ鳥　一ゑんこ鳥
一ゆかり鳥　一百ゑん鳥
一さえづる鳥　一ゐる雪
一蕨　一雲雀
一さくらゐ　一さいたつり
一樗の花　一角くむ藤
一菊の花祭　一こしふ
一芍薬和布　一ゆふあめ
一小豆粥　一芍薬
一鳥はなりの尾の　一春の夜　春の夜
一大原の祭　二月上卯日　一水はまつり

三月

一風ふゐ　一永日
一ををさ月　一巳の月はな祓
一桃の花　一梨の花
一櫻うり　一ちうり人
一花さかり　一さくら田
一櫻餅　一さくら貝
一蕨　一蕨
一蕨の花祭　一板の花祭
一東風のてん人　御祓九　一はるれ
一鳥ゆかり　一鳥の巣
一ゆる巣より鳥　一ゆる巣より鳥
一純尾の鶯　一朝鶯

補日

一鶯の巣　一菊つか
一[illegible]　一[illegible]
一蛇　一糸あやつり
一島やく（うの山焼　世とやく事）　一屋敷うり
一[illegible]　一苗代日なをし

卯月

一夜ゝ　一[illegible]
一時鳥　一松ぬり
一卯花うの花　一あしたぬり
一菖蒲　一神祭
一賀茂のこもれ　一日ぬる風
一[illegible]

一[illegible]の祭　一組夜
一夏祭の花　一[illegible]
一[illegible]　一[illegible]
一ひるの祭（月上の中の月之仁徳天皇ゟ）　一[illegible]
一松尾祭（右之日見）　一神[illegible]
一[illegible]　一[illegible]
一[illegible]　一[illegible]
一大神祭（三條の[illegible]）　一[illegible]祭

五月

一[illegible]月　一あやめ
一[illegible]　一[illegible]の菊
一あやめ　一[illegible]

一五竹
一蛍
一三ちりひる
一穂
一茶茶
一束稿花
一三月三さ
一稗糸
一せミ
一けさ月の粉
一茶色ふる書
一ちりのふかもの
一きる稿
一五番
一ひ取りの月
一あめひ茶
一三そひり（百ぢ ろろ）
一まこもろ
一水鶏
一あ母
一かく〳〵
一稗ふれり（唐子元 子ナ）
一色色の書
一風れ
一ひりの花
一ふし女

一西うふる
一ふをむふる
一みふふさ
一きを盤木丸茶茶一花の茶茶
一麦の秋
一蓮の子
一意茶丸花

六月

一涼
一梅子
一石丸竹
一砂室
一雲の峯
一ひこるふ
一あつき日
一蛍

一花ふふ
一水茶の花
一ちくさ寸
一面茶川
一数やう火

一蓮の花　一蓮の錢
一みな月　一夕かほ
一瓜　一扇　扇ハ八つ折りさしても扇の名ぞ有る
一泉　一さらし麻
一あちさい花もの　一御祓川
一風かほる　一夏虫
一ところ天　一茅の輪
一なでしこ　一秋近
一来ぬ秋　一秋待
一夏をくへ　一夏をも忘る
一縁り雲萱　一夕立
一たかむしろ

七月

一秋たつ　一葉ちる
一柳ちる　一桐の落葉
一女郎花　一秋の初風
一露　一霧
一虫　松むし鈴むしきりぎりす　一そのなすの錦
一七夕　一銀河
一秋さり衣　一ねゝかの糸
一かちの葉とる　一月あひ　早月也月見なき
一ひくらし　一船おろさ
一秋すゝし　一扇をく
一月　一錦葉
一いなつま

一蕨
一川萱
一芋の花
一公孫
一つさま
一文月
一豆田姫
一田のあぜく
一ゆやく

八月

一萩うり
一さくらのあぜ
一ちのこ草
一ちのこ
一芋
一田
一ちせをと
一鳩ゆく
一まつま
一ちけとの蕨
一ゆ草
一ちのこ草
一ちのこ
一芋
一蕨
一雁山色分
一芋ゆ
一初鼠
一ゆく
一田とも
一弱蓮
一ちのこ
一樋
一いなとちの蕨
一色角
一小書物
一ゆく

一蕨
一芋
一田
一ちせをと
一鳩ゆく
一まつま
一ちけとの蕨
一ゆ草
一ちのこ草
一ちのこ
一芋
一田
一ちせをと
一鳩ゆく
一まつま
一ちけとの蕨
一ゆ草
一ちのこ草
一ちのこ
一芋
一蕨
一雁山色分
一芋ゆ
一初鼠
一ゆく
一田とも
一弱蓮
一ちのこ
一樋
一いなとちの蕨
一色角
一小書物
一ゆく

一たちこ　一つゝ
一さうん　一このり
一桑月　一梅のゐ葉
一ぼうの花　一藤ゝ
一田面色付　一稗葉
一柳　一小角ちる
一紫の花色ちる　一宇治の花色の
一こうめ　一さひあを
一藍あを　一小田のかゝし
一ゐめ　一作
一ゐすゝむ　一ゆ
一ちやうの書　一ちゝ書
一小豆柴八月宮迄　一月の桂の花

一ちゝの花

九月

一藍時雨　一ゐ葉
一ゐきちる　一菊　又翁方
一冬近　一ゐの香より
一蓋　一藍葉
一ちゝ枯　一木の葉ちる
一ゐねゐ　一朝さむ
一紅葉　室廣八冬ゝ　一ちゝ宮ゝ
一ちゝ宮ゝ　一芦のや
一ちゝ化　一砂ゝ菊
一芦枯　一藍葉の色

一雲人の物
一霧雨
一あられ
一長月
一ひつじ雨
一秋の長雨
一雪よ雪むもらひて
一桜の霧
一菊の雨
一伯夷の帝
一菊月
一赤すすきの穂
一ろう月
一風
一冬ごもり
一ちるもみぢ
一水鳥
一ちる

十月

一雨
一冬ごもり
一ちるもみぢ
一水鳥
一ちる
一紅葉
一小春
一ひとり人
一ちるもみぢ
一冬ぼけ
一ふゆ
一炭
一小春
一あられ
一雪
一霜
一炭やき

十一月

一雪

一三尺
一ゆき
一杉糸
一ろう
一水色
一月糸の糸
一しまき
一巻のありの巻
一月の水
一ふとま
一小糸

一水
一杉糸
一藤の巻うこの
一あつし
一小長衣
一巻史
一懸史
一巻巻
一巻の水
一あつかいん

十二月

一しつ
一巻の物
一年を結
一仏とうの
一ひとつ年
一行年
一ちやら
一鬼屋ろし

一年の巻
一巻近
一年を守
一ろうまこう
一年の間は巻
一巻のとく
一ちいさの巻
一巻物の史

神紙

一升ゆき
一強籬
一糸

一巻恒
一ひろまん
一しめり

一よしの
一ぬさ
一くして
一白楽
一ミくろし
一經池
一ミねさき
一柳かた
一くりまやしきを貴之
一いのち
一野の宮
一殺
一忠行
一ひまつき
一ゆふかほ
一たま衣
一殺生のくらひ鳥の
一三井寺

尺教

一三の仏
一源の仏
一彼岸
一御法

一橋つむ
一おくさきき
一あくもまよ
一たこたまい
一花とめ
一まくらひの雲
一なさとりの庵
一龍田清山
一華世園
一菖蒲の人
一心の月
一胸の月
一ふれ葉
一殺のとうえ
一花ち
一いまのあしさ
一すゝしき庵
一扇のひの様
一ます
一萩さら
一芭蕉の竹
一形見焼香
一芥川のちらん

懷旧

一若衣　一墨の袖
一袴の分　一老ぬ分
一うさ分　一親子
一忌籠　一うれり
一分ちくり　一宿老
一老間　一老ぬ見る
一ゆうり　一老とてむく
一棄つ　一命
一玉の弦　一ちりの身
一ちりの老　一生死
一白髮　一數の角けゆく
一殘のけのうり　一及の君棄

一罪科　こうとは人を懷ふます　一苔
一石　一老

懷旧

一花　一むり
一ゆ人　一古を思ふ
一古人　一月ハかうく
一苔うり　一月ハ老て
一ゆ人ぬ思ふ　一ゆくのうり
一古ゆ

哀傷

一哀人　一本ちさ

一京八月
一京はの系
一なとれたそろ
一ものあれさ
一石部
一三井せ川
一夕ろろ
一つのもれ
一月の夕ろ
一春夜

藤羽

一京拵

一京六なく
一鳥人飛
一その目とゆ
一西まとり
一月ろり川
一しその山
一魂を反せ湖
一せとあくな
一をりこく
一おりて結

一ろ拵

一拵京
一京をしろ
一紅葉
一京むしろ
一山ろ夜
一山鳥とものく
一飛よ外
一鳥の夢
一弱へいそく
一るれるむけ
一明立飛
一京こゆる
一星とふ

一ろしき
一紅ろろ
一石をし
一山紅
一飛とろ切
一ろり居
一よまろ
一紅の夢
一るのと
一別切石
一紅葉石
一釜中ろ
一高ろ

一新枕　一わか中らへ
一両中らひ　一りう夜
一詫言　一来ぬをうらむ
一私　一忍ふ縁
一本縁　一逢縁

恋詞

一ちぎり　一色のむつ
一花かいと　一床のちりをはらふ
一ゆかりのある　一うき中
一うき名　一名をよごし
一二人なかにも　一うらみ
一立川　一玉章

一文　一やきもち
一うさ人　一うら紀人
一つらき人　一君
一妹　一住ま。
一おもひ　一ものおもひ
一ものうさ　一忍ぶる
一うきこともある　一紬覚
一うれゆく名　一あいなれめ
一人なのめ　一おやまし
一いやになれ　一恋し
一恋さへならうさ　一あさるゝ恋
一初め寝夜　一あふ後朝
一閨　一まくれの閨

一たく者
一たくさうへ
一ものゝ
一あらくる
一神のさゝふ
一下紙
一あさるゝ
一まくまる
一うとゝ引人
一ゝる祢
一長ゝたせ
一ゝ人
一ゝ都
一ゝうこゝす

一ゝ者はなく
一くさうへ云
一つむゝる
一疫れ
一ひまう
一あゝ人
一家く
一高行人
一まゝ祢
一長のゝち
一姫
一ゝ都
一ゝうこゝす

一ゝ世ゝ
一下常つゝ
一高のへて
一めゝた
一下都ゝ
一つゝ
一人目つゝ
一猫ゝうゝす
一色ゝ
一人ゝの字
一神ゝ
一ゝ人
一神ゝ
一ゝ穴ゝ
一神の乳色

一併ゝ
一ゝゝ
一箱の見ゝふ
一高の間ゝ
一下ゝ
一色ゝ
一ゝゝ
一ゝすゝ
一ゝるゝ
一人ゝゝ
一神の義
一枝ゝ
一ゝゝ

一物のあつらえ　一くりこの物
一来の松山彼岸　一牛蒡の下葉
一人うらうめ　一中の茅舎
一人まくらもと　一二変のこ
一ろろ丸嘉　一ろる都
一ろろの縁　一ろろうへ
一をゆるひ　一夢ひたり
一ろうろろ　一人の秋
一ろ姫人　一ろたろん
一ろ姫のうろう　一えす
一元をもふ　一御さえ
一川り　一ゆ紙ゆ
一ろたろ人　一ろろの閑

一来を祭り　一すろん
一うやまる中　一ろ日かる
一ろ祭のろ　一ろ

かるる部

一夏ろ　朝ろろ花む
　花むろ
一田ろ　ろろうろ　ろろうろ
一山ろ　ろのふ丸やま沢
一時ろ　ろうろ入ろ
一雪ろ　ろうひをろす
一時ろ　物俺ろ　ねろのろ
一原ろ　ろうろ　時すろ
一ろろ　まろう

終